



NEWS RELEASE

JRタワー「アートボックス2020」選考結果のお知らせ

札幌駅総合開発株式会社では、JRタワー開業以来「JRタワーアートプロジェクト」を展開していますが、その一環として、北海道のアーティストたちに新たな発表の場を提供することを目的に、2008年4月からJRタワー1階東コンコースに「アートボックス」を設置しています。

このたび、2020年度に向けた、公募型コンペティション作品2点と活動実績を基にした作家指名のプロポーザルによる作品2点の選考を行い、決定いたしましたので、お知らせします。

作品は、6月から順次JRタワー1階東コンコース「アートボックス」に展示する予定です。

記

1. 作品選定の公募型

(1) 優秀賞（賞金：30万円）

受賞者：清武 昌（きよたけ しょう）

作品名：「boundary」

作品概要：色々な図を重ね合わせていく中で、それぞれの存在感が不明瞭になり、もともとの形を失う瞬間を作品のなかに表現し展示する。

(2) 優秀賞（賞金：30万円）

受賞者：守屋 杏（もりや あんず）

作品名：「刻・積～刻まれ積もりゆくもの～」

作品概要：札幌駅は、歴史が積み重ねられてきた場所であり、今も過去の積み重ねの上に現在が成り立っている。自身が積み重ねてきた書の墨で書かれた文字を切り取り重ね合わせ展示する。

2. 作家指名のプロポーザル

(1) 作家名：長谷川 裕恭（はせがわ ひろやす）（彫刻家）

作品名：「愛の反対は憎しみではなく無関心である」

作品概要：地方と大都市の地域間の分断、現役と高齢者の世代間の分断など、至る所で存在する。その分断について、思索を巡らす中で出会った言葉や湧いてきたイメージをユニークな視点で表現し展示する。

(2) 作家名：藤沢 レオ（ふじさわ れお）（彫刻家・金属工芸家）

作品名：「場の彫刻」

作品概要：「場の彫刻」のシリーズで、繰り返し登場する「柱」を遺物として展示する。「柱」は、祖先が、枝を拾い集め、家らしきものをつくり、雨風をしのぎ、命を紡いできたものではないかと想像し、柱を立て続けてきたことは、現代の繁栄を創った端緒として、輝かしい行為であり、この行為を可視化する試みである。

3. 選考概要

公募作品の2点につきましては、2019年11月1日から2ヶ月の間、募集を行い13件の応募がございました。様々なジャンルの作品プランから、厳正なる審査の結果、一次審査(書類)において5作品に絞られ、二次審査(プレゼンテーション)により2名の受賞者が決定いたしました。

作家指名のプロポーザルにつきましては、推薦委員より5名の推薦を受け、最終審査で2名が選ばれました。6月から順次JRタワー1階東コンコース「アートボックス」に作品が展示される予定です。どうぞご期待下さい。

4. 審査員講評

(1)伊藤 隆介(映像作家/北海道教育大学教授)

今回のARTBOXの審査において注目されたのは、この空間を軸とした、「作られる根拠」という点であったと思います。高さ1.3m、横幅2.3m、奥行き0.6mの空間を、自作を陳列するディスプレイと捉えるのか、充実した空間を充填する容器と考えるのか、あるいはそこから地続きの「駅」という社会に発信する装置を欲しているのか、ということです。二つの入賞作は「個からの発信」にあたる作品で、「ARTBOXがなければ成立しない」とも言えました。

守屋杏さんの『刻・積』は、書を「文字を書く」という行為から意味や動き、素材などを抽出し、再構成しようという試みでした。弱冠21歳とはいえ、堂々たる、そして情熱のこもったプレゼンテーションが見事でした。発想や思考にはまだ死角が潜んでいますが、創作に対するひたむきな熱意と、必ずやり遂げて「自分の存在」を伝えようとする若々しい野心に惹かれました。

対照的に、清武晶さんの『「boundary」』は、自身を含めたセクシャリティなど、パーソナルな主題の作品です。個々人が密やかに、しかしコンコースを鳥瞰すれば間違いなく誰でもが抱えているというテーマに注目した、制作されるべき内的な根拠がしっかりした作品でした。

実制作ではそのテーマを仄(ほの)めかすにとどまらず、より精度を高めた表現で、とりわけ価値観を異にする人たちの共感をどう引き出すのかが期待されます。

この二人の作品が、共に最終選考に進んだ他の候補者や、二次審査を果たせなかった多くの作品と比較して、表現の質が著しく高かったということではなかったと思います。「箱」を起点とした「外」への切実さと、前向きな視点への期待点が大きかったと言っていいでしょう。むしろ、ベテランの作家たちによる候補作の技巧の方がはるかに高く、例えば工芸作家として活躍される森収吾さんの陶によるロシア正教会群『無題 2020』は、端正な造り、魅力的な質感は、すでに完成されたレベルのものでした。作品がそのままでも完結しており、(おそらくは真面目な人柄を反映してか)プロポーザルも実直でケレン味がなく、言い換えれば「箱」を必要とする切実さが薄い。しかし、ユーザーとの「対話」の成立を当然とする商品としての枠を超え、森さんの造形が大きな集合体やランドスケープとしてとして展開して、より「大きな会話」が始まる瞬間は大いに見てみたいと思いました。

禅のコンセプトをキネティック・アート化した平野功喜さんの『「十牛図」』も、デザイナーらしい明快で知的なプレゼンテーションが印象的でした。作品自体も装飾を削いで、削いで、単純化し、プロダクト・デザインのレベルまで象形的美を追求した意欲作でした。作者の存在すら

滅したストイックな秀作でしたが、ウエルメイドなデザインがあふれる今日の社会で、現代の美術（ARTBOX もそこに含まれていると信じたいですが）に求められているものは、むしろ造形を通し、平野さん自身の生が垣間見える、しかし多くが共感できる「肉声」であるような気がします。今回の審査では、そのミスマッチが残念に記憶に残りました。

若手彫刻家・梅田力さんの『線の弾き方』は様々な素材（線材）を使った、空間におけるドローイングというべき作品で、いちばんの可能性を感じました。ミニマルで極めて美術的な手法でありながら、場に充満する（産業や流通も含めた）「権力」「権威」にツイストを加えようとアプローチは、成就すれば多くの人々が共感するところだと思います。極めて乱暴な言い方をすれば、美術とは「美を通して試みられる、既成概念を揺さぶるテロ」とも言えます。一方で、梅田さんのキャリアや過去作品と比較して、今回の作品にはまだ遠慮が感じられたのが正直なところでもあります。次回公募の大きな楽しみです。

最後に、審査全体を通して残念であったことをひとつ述べさせてください。今回の応募では、アイヌ文化やその自然観について触れたものが見受けられたことには隔世の感がありました。一方で、多くがフォークロア的な「トレンド」といった捉え方、政治的な正しさを担保するためのエクスキューズ、あるいは北海道といえば「熊」「カニ」というような観光上の紋切り型の扱い方で、むしろ「新たな搾取」も感じたものです。先住民族の文化や歴史が光るのも、おそらくは自分自身の生との関わりや比較について思考がなされた場合でしょう。やはり、個の切実さがベースと思います。

(2) 岡部 昌生（美術家）

テンポラリーなパブリックアートに挑戦する函空間の11年は、人が行き交う都市の定位置で、“クリエイティブな”という姿勢で変容つづける時代の相の可能性を創造の力をもって“ここから”発してきました。ちいさな存在ゆえに、強度、深度、鮮度をもった表現をともに探ってきました。それは、今日の表現者の態度でもあると思います。

ここに連なる5人の表現者の態度は、

森収吾さん：尖塔のつらなる光景を原風景といい、天空を抱える空間の広がり物語を生むという。土を焼くという根源の営みを重ねている。窯の大きさの限界を作品のスケールに及んだと。走泥社に関わり陶歴もある。ならば窯という制度を捨て焼成する行為もあるのではないかと思います。

守屋杏さん：書くこと文字のなりたちに還り挑戦しつづけた墨人会の活動が、かつてのアヴァンギャルドに共振した美術の歴史に共感することは理解できます。書く行為の集積の深さは、日常です。切り抜き、積み重ねる。「土」を割りぬいた紙の集積は穴となり、土を掘るという大きな主題も視えてきます。美術の行為となる態度も探ってください。

平野功喜さん：「禅」修行の過程を世界観へと誘う図をとらえた無窮ともいえる時間の相。円形の『十牛図』としてキネティックな手法でとらえた図像は、簡潔でさまざまな位相を喚起してくれます。円形ゆえに時計時間の相と重ねてしまいますが、造形のことではなく、作家の世界の表出こそが、だと思いました。

梅田力さん：提示された「場について興味がある」ことに興味を持ちました。「場が作品を規定する。作品を取り囲む様々な事、特に権力に・・・」。差別、区別、前線、不連続線、境界線と、むしろ視えないものを視えるようにすること、場から取り出されたひとつの有り様の提示は、美術の力ですね。

清武昌さん：かつて対象を凝視した、その集積ともいえる目と手による痕跡が絵画を構築して存在感を放っていた表現を記憶します。日常の、触れた膨大な情報や図像の集積は、象の輪郭も積層され曖昧なままだろう。その日常、現実からデジタルなプリントの積層でなく手の終わりのない身体の作業の切断面を想像し重ねています。

(3) 上遠野 敏（札幌市立大学教授）

応募書類から選ばれた5名の作家さんの2次審査会があり、プレゼンによって作品を深く知り得る機会となりました。私が思う審査の観点は、規模は小さいながら「アートボックス」を起点として、今までの作品の良さを生かしながらも、固定概念を脱ぎ捨てて新たな自分を作り出す覚悟があるか否か。新規性はあるか否か。を中心に審査させていただきました。

森収吾さんの陶芸は幻想的でプロとしての評価も高い。一個一個のオブジェクトの完成度も高く心惹かれるものがありました。しかしながらアートボックスの中で求められるものは、これまでの表現をさらに拡張して未知の世界観を全面に押し出していくことが求められています。他の作品をウェブで拝見しました。より実験的なシュルレアリスムの表現が見受けられました。「シュバルの理想宮」の様な天地創造を超えるような造形を引き連れて、再チャレンジをお待ちしております。

守屋杏さんの書によるインスタレーション『「刻・積～刻まれ積もりゆくもの～」』は北海道の大地を開墾した人々の歴史とアイヌに伝承されるあの世とこの世の通路を往還するアベコベの世界観や虚実や物事の表裏を、彼女の身体と行為を通した書を結界として刻み、歴史の古層を一枚一枚確認する様に積み上げ、あるいはひっぺがす作品でした。一見どこにでも有りそうで、どこにも無い作品表現になっていました。おそらく、アートボックス史上最年少の大学3年生の受賞者であり、多くのキャリアを積んだ作家の中でも際立った新鮮さとプレゼンの説得力がありました。北海道を表現するのに開墾やアイヌの考察は通らなければならない通過儀礼と考えます。このような思考や経験を通して造形表現のボキャブラリーを獲得して欲しいと願っています。まずは、アートボックスでどの様な展示を見せてくれるか、可能性をどこまで伸ばしてくれるのが楽しみな作家です。

平野功喜さんの作品は、禅の悟りの段階を表した『十牛図』をヒントに、時計の秒針を使ったキネティックアートで作りも丁寧でした。本来の十牛図は絵と詞書の讀からなっていて段階を踏んで進んで行くもの。プランは10のパネルが整然と2段に並んでいて、同時に秒針（物事）が進んで行く仕掛けなので、惜しむらくは、相互の有機的な関連性が影響していく仕掛けが望まれます。それが『十牛図』の絵を補完する詞書の讀の役割を示してイメージが作らむのではないかと思います。プレゼンで見せていただいた作品「夏まわる」の様なイメージが重層するカオスと理性と理が同居する表現へつながることを期待します。

梅田力さんの針金、紐、竹、布を用いて作る作品はシュルレアリスムの自動書記の様であり、当意即妙な制作姿勢は禅の求める融通無碍な世界観に通じます。提案いただいたプランは5つのパーツをつなぎ合わせたものを、縮小サイズのマケットの窮屈に並べたものなので、展示構成が横一列の構成となり前後左右の空間構成が魅力的には見えませんでした。プレゼンで見せていただいた空間を支配する作品は魅力的でした。作品の形態は違いますが、ルイーズ・ネーベルソンの箱型のアッサンブラージュ作品は、素材の味や質感を語らせないためにあえて単一なペンキで隠蔽しています。それはペンキ文化の欧米ではありがちなことです。日本では物質に神が宿る国。例えば、素材との対話によって素材を生かした美味しい料理ができる様に、アートも素材感との対話と構成力、身体の関わりと行為の視覚化などの拡張を期待しております。

清武昌さんが新たにチャレンジして作り出した手書きのエッジを意識した線を多重に重ねてデジタル化した出力プリント作品は、それまでに制作してきた作品と一線を画して大きな可能性を感じました。見る側が想像の振幅を与えられた表現になっています。ただ、出力プリントが光沢のあるもので、映り込む光の反射で作品を見にくくするばかりか、作品から見る側との間に、あえて距離を作る印象を受けました。試しにマット紙や布へのプリントも試してください。絵画の表面性も、染色の様に布の内側から空間全体に発色するものとは色の深遠さが違います。トーマス・ルフの日本のテレビアニメのドラえもんやピカチュウなどの画面の写真を何層にも重ねた「基層」を考察してください。ただの色の重なり的美丽なプリントに見えますが、そこにはエッジが隠されて、美しい色彩が私たちの身体さえも包み込むような懐の深い作品になっています。

(4) 國松 明日香 (彫刻家)

今回の応募作品は、作品設置場所である JR 札幌駅東コンコースのアートボックス内を強く意識してプランされた作品が意外と少なかったように感じた。一次審査の段階では、私は特にそのところに注目して審査をしました。まずボックスの空間(高さ 1.3m、横幅 2.3m、奥行き 0.6m)内をどの様に捉え、どう使うか。そしてその前を通り過ぎる人達を立ち止まらせ、作品に注意を向けさせることができるかどうかである。

一次審査に応募されてきた作品は、プレゼンテーションは例年に比べ、概ね良くなっていたように感じた。それだけに、冒頭に記した点においてはとても残念な想いをもった作品も見られた。

陶を使った森収吾さんの作品『無題 2020』は、ひとつひとつの作品は完成度もありレベルの高い作品と感じた。しかし、それをアートボックス内に展示したときに、それらをただ並べたというレベルに終わっている。ボックス全体の空間に対して作品の置かれ方が小さく纏まり過ぎていて、上部に大きな空間ができ、アートボックスの空間を活かしているとは思われなかった。普段の作品作りからもう一歩考えを進めて挑戦して欲しかった。

守屋杏さんの作品『刻・積～刻まれ積もりゆくもの～』は、札幌駅を行き交う人達と時を刻み、歴史が積み重ねられてきた場であると捉え、自身が長年培ってきた「書」を活かした説得力のある作品として提案されている。アートボックス内の壁と床、天井を使い、中央には書で描かれたものの切り取った部分と切り取られた部分をそれぞれ積み重ね展示する。アートボックス全体がたくましい大地をイメージさせる作品といえる。実際の展示を今から楽しみにしている。

平野功喜さんの作品『十牛図』は、「禅」の世界の基本となる十牛図をキネティックアートで再現したもので、とてもシンプルなデザイン性の強い作品である。針を動かす動力は時計を使い、60秒で1回転するようになっているが、既製の時計の中にも似たようなものが散見される。それ故どこかオリジナリティーが感じられなかった。また、忙しく行き交う人達に『十牛図』の考えを伝えるのに適した表現であるといえるのか疑問を感じた。

梅田力さんの『線の弾き方』は、竹や布やひも、針金で造られた立体作品で、黒一色に塗られた作品は躍動感のある作品に感じられた。ただ、アートボックス内に置かれたとき、立体感が損なわれている点が気になり、余白への配慮がもう少し欲しかった。また、作品の純粹性に言及しているにも関わらず、conceptの中で作品と社会性の関係についても述べられていて、疑問を感じられずにはいられなかった。

清武昌さんの作品『boundary』は、美術の世界が今まで色々な形で挑んできた「輪郭線」について果敢に挑んだ作品と言える。色々な図を重ね合わせていく中で、それぞれの形の存在感(輪郭線)が不明瞭になり、もともとの形を失う瞬間をコンピュータで作った画像で展示する試みである。作品を見る側は、何が描かれているのか輪郭を追いかけて見つめることになるのだが、果たしてどの様な作品として私の眼前に現れるのか、是非とも現場で見たいと思った。

＜本件に関するお問合せ先＞

文化事業部 寶地（ほうち）・佐藤・木藤 TEL. 011-209-5075 / FAX. 011-209-5074